

(令和8年度宮古高校定時制4年 Aさん)

A:「あなたが共感したのはどういう所ですか？」

ただ物資を送るだけではなく、お互いがお互いを助けたいという気持ちを持つことこそが国際協力、という所に共感した。確かに物資を送ることも大切なことだと思うが、人の思いやりや言葉によって元気や勇気をもらい救われることもあると思う。だから国際協力や支援は、助けたい、自分も力になりたいと思うことが一番大切だと感じた。

B:「選んだ小論文を読み、これからあなたができることは何ですか？」

世界にはまだ知らない問題がたくさんあると思う。それを知るために現地に行ったり、直接物資を送ったりとすぐに行動に移すことは難しい。まずは、世界で起こっている問題を調べ、理解することから始めたい。

現地には行けなくても支援する方法はたくさんあると思う。たとえば募金をしたり、フェアトレード商品を買ったりして経済支援をしていきたいと思う。また、ボランティア活動に参加し、地域の方との交流をしたい。

小さな理解の積み重ねが、いつか大きな国際協力につながると思うので、問題を知ることから始めてゆきたい。

選んだ小論文

01) 【震災当時、宮古高校2年生】 平成23年度・宮古高校3年 Sさん

『私が考える(できる)国際協力や支援活動』

私が考える国際協力とは、ただ物資を送るということではないと思う。お互いがお互いを助けたいという気持ちを持つことこそが国際協力なのではないかと考える。

今、世界では紛争が起きていたり、飢餓で苦しむ人がいたりとかくさんの問題を抱えている。そして、3月11日に東日本大震災が起き、支援が必要な人が大勢いる。大震災を経験し、人の命の尊さ、今までの自分の生活がどれだけ贅沢だったかなど様々なことを考えさせられた。中でも強く思ったことは、協力し合うことの大切さだ。避難所にボランティアに行ったおり、外国のボランティア団体も多く見かけた。その中の1人がおばあさんの肩をもみ「僕らがいるよ」と片言で話しかけていた。そしておばあさんが「力になりたいって思ってくれることが一番うれしいよ」と言っていた。私はその通りだと思った。確かに、物資の支援がとても大切で、物資がないと生きていけない人もたくさんいると思う。でも、力になりたい、助けたいと思うことが支援される側も一番嬉しいと思うし、その気持ちが一番大切なことだと思う。力になりたいと思う気持ちから国際協力は始まっていくので、その気持ちを持つことが大切だ。

世界には、まだまだ知らない問題があると思う。私は問題を知り、理解することから支援につなげていきたいと思う。

（令和8年度宮古高校定時制4年 Bさん）

A：「あなたが共感したのはどういう所ですか？」

震災のことを後世に伝えていくということです。震災から何年も経ち、震災のことを知らない人達がたくさんいると思います。今の小、中学生は震災を体験したことがないので、どれくらいの被害があったか、街はどのようになってしまったのか、またこれからは大きな地震や台風が起きてしまった時のために、何をすればいいのか、知識があれば役に立つと思います。

B：「選んだ小論文を読み、これからあなたができることは何ですか？」

私もこの人と同じように、震災を知らない世代の人達に伝えていきたいと思います。地震は突然起きるもので、私達には予測ができません。だからもし、大きな地震が起きてしまった時、津波が来てしまった時、どこに逃げればいいのか、しっかり知っておいて欲しいです。そして万が一のために、長持ちする食品や暖が取れる物、水などをしっかり自分達の家に備えて欲しいと思います。また、自分達だけではなく、知り合いの人や友達と協力し、助け合って欲しいです。いつ起きてしまうか分からないものだからこそ、知識をつけて、人と協力し、万が一に備えて私も生活していきたいです。

選んだ小論文

03) 【震災当時、田老第一中学校2年生】 平成25年度・宮古高校2年 Nさん

『3. 11から三年目の今、私ができること』

私は3. 11の東日本大震災を実際に経験したし、実際に目にしました。その津波があつてから3年目の今、私ができることは2つあると思います。

1つ目は、後世に伝えていくことです。私達は本当に辛い経験をしました。しかし、これが最後という訳ではありません。津波や大地震は、何年、何十年、何百年後かにはまた起こるものです。もしかしたら、東日本大震災よりもひどい震災になるかも知れません。次の震災でたくさんの人の命を失わないためにも、このことを語り継ぐべきです。大人たちが語るより、私達若者が経験したことを話す方が、これからの人たちにはタメになるのではないかと思います。本当にあったことを話すのは正直辛い部分もありますが、全てを話すべきです。

2つ目は、3. 11の大震災の反省をもとに、これからの街作りや防災対策について考えていくことです。これから将来、街などを復興・発展させていくのは私達です。その私達が、今からそういうことを考えていくべきです。どんな街にすればたくさんの命が救われるのか、どんなことをすれば多くの人が避難できるのか、それを考えるのはこれからの未来を担う私達だと思います。

3年前の震災で、たくさんの辛いことや反省があると思います。それを語り継ぎ、考えていくことが、私達ができることであり、私達の役割なのだと思います。

(令和8年度宮古高校定時制4年 Cさん)

A：「あなたが共感したのはどういう所ですか？」

地震や津波の経験を忘れず後世に伝えることが大切だということに共感しました。私も東日本大震災の日は少し覚えています。私の家は山の高い所にあるので、津波による被害はありませんでした。それでも不安はあって、水道も電気も止まった家で家族全員一つの部屋に集まって眠りました。災害による経験を楽観視してはいけないし、それを忘れてはいけないと思いました。

B：「選んだ小論文を読み、これからあなたができることは何ですか？」

災害は経験した人にしか分からないことがあり、それを後世に伝えられるのも経験した人だと思います。被災した方の体験や震災の教訓を次の世代に伝えて、同じ被害を繰り返さないようにすることが大切です。いつ起こるか分からない災害に備えることが、大切な人や自分の命を守ることに繋がります。避難場所を調べておいたり、日頃からの防災意識を持ったり、地域のボランティアに参加するなど支援が必要な方のためにも、身近な人と助け合っていきたいです。自分の命は自分で守るしかないので、災害や防災について学び続けることと、東日本大震災を忘れないことを大切にしたいです。

選んだ小論文

04) 【震災当時、新里中入学前(小学6年生)】 平成26年度・宮古高校1年 Nさん

『東日本大震災を後世に伝える方法』

東日本大震災を後世に伝える方法として、まず一番大切にしなければならないことは、地震を経験したこと、津波を経験したこと、震災で大切なものが失われたということを忘れない事だと思います。忘れてしまったら、伝える方法はもう無くなってしまうのだから。

私は、小学6年生の寒い卒業前の春に起こった事を、まだ鮮明に覚えています。卒業制作途中に止まったミシン、揺れた時計、波打った自分の心臓の音。あんなに早くランドセルに道具を詰めたのはあれが初めてだったと思います。全員でトイレに行き、入る直前で余震が起こり、うずくまった私達を抱きしめてくれた担任の先生の大きな腕でさえも、まだ記憶に残っています。帰る途中、当時小学1年生だった妹が震えているのを見て、妹の手を強く握って歩きました。「こいつだけは守ってやんなきゃ」と思って。私の住んでいる所は山の中なので、津波により家が壊れたとか、大好きな人が流されたとか、そういう被害はありませんでした。しかし、幼い私達の心には地震と津波への恐怖がくっきりと残されています。決して楽観視してはいけないのです。それを、岩手だけではなく、他県や自分の子供達へと伝えていくことが、後世へつなげていく一歩なんだと思います。

(令和8年度宮古高校定時制4年 Eさん)

A:「あなたが共感したのはどういう所ですか？」

「今、生きているということが、どれだけ恵まれているのか」。当時3歳だった私は、3.11のことを全く覚えておらず、母から当時のことを教えてもらった。私が今こうして生きていられるのは、あの時私をおんぶして必死に逃げてくれた祖父や家族のおかげだ。命がけで守ってもらった私だからこそ、生きていることのありがたさを深く感じる。当たり前の日常の尊さを忘れず、一日一日を大切にしたい。

B:「選んだ小論文を読み、これからあなたができることは何ですか？」

今の私にできることは、この命を大切に全うすることだ。まずは、一日一日を全力で生き、「明日やろう」と後回しにせず、目の前のことに一生懸命取り組む。困難にぶつかった時は、私をおんぶしてくれた祖父の姿や、当時の話を思い出し、それを糧にして頑張る。

私はこの小論文を読み、命の重さと当たり前の日常の尊さを感じた。だからこそ、震災のことを次の世代へしっかり語り継ぎ、「自分の命を守るために、どのように動くか」を、みんなで考えていきたい。当たり前の毎日が、どんなに幸せで尊いかを伝えながら、震災の教訓を未来へしっかりと繋いでいきたい。

選んだ小論文

05)【震災当時、吉里吉里中学校2年生】 平成26年度・宮古高校3年 Kさん

『3.11から四年目の今、私ができること』

東日本大震災から今日まで、様々な節目で「今の自分にできること」を考えました。その末に辿り着いたのは、「今を一生懸命生きる」ということです。具体性がない、と言われるかもしれませんが、私はこれが「今の自分にできること」であり、「やらなければいけないこと」だと思います。

震災で私たちは多くのものを失いました。未だに戻ってこないものも沢山あります。「明日やろう」と思っていたことができなくなりました。「当たり前だ」と思っていたことの大切さに気がつきました。今、生きているということが、どれだけ恵まれているのかを感じました。それゆえ、私たちは何をやるにせよ、この一瞬一瞬を全力で生きていかなければならないのです。震災により命を落としてしまった方々の分も、有意義な人生を送らなければならないのです。

私たちが今を懸命に生きることは、将来の社会貢献にもつながります。震災での経験を活かし、未来を創り上げることができるのは私たちです。しかし、「一生懸命」というのは決して簡単なことではありません。辛いときも疲れてしまうときもあると思います。そういう時こそ、東日本大震災を振り返り、忘れないようにすることが大切だと思います。

震災前、当日、直後、全てを知っている私たちだからこそ創り上げることのできる未来を、一生懸命築いていきたいと思います。復興に役立つ人間に成長していきたいです。

(令和8年度宮古高校定時制4年 Hさん)

A:「あなたが共感したのはどういう所ですか？」

山田の地形を活かした建物を造り、避難できる場所の整備をするというところに共感しました。理由は2つあります。1つ目は、海に面している以上、これからも津波と向き合う必要があり、山田の地形を活かした建物を造るというのは、津波との向き合い方として適していると思います。2つ目は、避難場所を分かりやすくすることです。確かに高い所に広いスペースがあるのは安全だし、避難がしやすいと思います。

B:「選んだ小論文を読み、これからあなたができることは何ですか？」

これから私がしていこうと思うことは、津波との向き合い方を考え、知らない人達に広めていくことです。沿岸にある町に住む以上、地震大国である日本で津波は切っても切り離せない関係にあると思うからです。そのため、次いつ来るか分からない津波の被害を少しでも減らすために、日頃からできる避難場所や避難経路の確認、防災グッズの準備などをしたいと思います。

そして、被害を受けたことのない地域の人達やこれからの人達に、被害を最小限にし、誰もが安全に避難できるように伝えることが、今の私や被害にあった沿岸の人達がやらなければならないことだと感じています。

選んだ小論文

08)【震災当時、船越小学校4年生】 平成30年度・山田高校3年 Oさん

『身近な自然環境を活用した防災・減災』

私は自然環境を活用するという事で、山田の地形を活かした建物を造り、避難できる場所の整備が必要だと考えます。まず、山田は平地が少なく、山が多いです。その特徴を活かしてより高台への住宅再建が可能です。その為には山を切り崩さなければなりません。山が減れば反対する人達がいるかもしれませんが、その山を崩して出た土を海側の誰も住まない所に持ってきて、新たな苗や木を植えれば良いと考えます。

また、誰もが行ける高台の見晴らしの良い所に公園や広場を造ることができれば良いと思います。私が実際に小4の時に経験した津波では、高台に上がる所が無く、ただの山の中を1～6年生まで泥まみれになりながらも駆け上がったのを覚えています。その時、後方から波がすぐ近くまで来ていて、電柱や家も自分達の方へ勢いよく流れてきました。そんなことがないように、誰でもすぐ上がれる広場があるといいです。また、小学校から家へ帰る時に松林を通過して帰っていましたが、海沿いにすぐ松林があったおかげで助かった家も船越地区では多いと思います。

なので、山を崩した後の土や木は、海側に持ってきて盛り土をし、さらに松林のような自然環境を造ることが必要だと思います。防潮堤だけでは守り切れないところを林が守り、さらに家が高台にあることで、少しでも被害者や被災する建物などを減らすことができると思います。

(令和8年度宮古高校定時制4年 Iさん)

A:「あなたが共感したのはどういう所ですか？」

災害がやってきた。「被害を後世に伝えなくては」だけではなく、著者は自然環境、それも山田の地形を用いた具体案を書いており、なにより実体験に基づいた内容で、考えが良く伝わりました。山田には山が多いから、ただ山を切り崩し家を建てる、ではなく、その切り崩してできた土の利用法として植林の土台にする、あるいは避難場所として高台に公園や広場を造る等、植物の防災効果への理解度が高く、共感できました。

B:「選んだ小論文を読み、これからあなたができることは何ですか？」

このような街づくりを実現するために、私たち高校生にもできる事があると思います。まず、東日本大震災の経験や教訓を忘れず、家族や地域の人から当時の話を聞いて学び、次の世代へ伝えていく事、また、防災訓練や地域の避難訓練に参加し、実際に避難経路を歩き、知っておく事だと思います。

何より、日頃から家族や友達と連絡をこまめにとっておくべきだと思います。いざという時連絡ができないと、命に関わるので、非常時での連絡手段の共有、避難場所の共有など、いざという時のために事前準備が大事だと思います。

震災で起きた出来事を忘れないのが、一番の対策になると思います。

選んだ小論文

08)【震災当時、船越小学校4年生】 平成30年度・山田高校3年 Oさん

『身近な自然環境を活用した防災・減災』

私は自然環境を活用するということで、山田の地形を活かした建物を造り、避難できる場所の整備が必要だと考えます。まず、山田は平地が少なく、山が多いです。その特徴を活かしてより高台への住宅再建が可能です。その為には山を切り崩さなければなりません。山が減れば反対する人達がいるかもしれませんが、その山を崩して出た土を海側の誰も住まない所に持ってきて、新たな苗や木を植えれば良いと考えます。

また、誰もが行ける高台の見晴らしの良い所に公園や広場を造ることができれば良いと思います。私が実際に小4の時に経験した津波では、高台に上がる所が無く、ただの山の中を1～6年生まで泥まみれになりながらも駆け上がったのを覚えています。その時、後方から波がすぐ近くまで来ていて、電柱や家も自分達の方へ勢いよく流れてきました。そんなことがないように、誰でもすぐ上がれる広場があるといいです。また、小学校から家へ帰る時に松林を歩いて帰っていましたが、海沿いにすぐ松林があったおかげで助かった家も船越地区では多いと思います。

なので、山を崩した後の土や木は、海側に持ってきて盛り土をし、さらに松林のような自然環境を造ることが必要だと思います。防潮堤だけでは守り切れないところを林が守り、さらに家が高台にあることで、少しでも被害者や被災する建物などを減らすことができると思います。

（令和8年度宮古高校定時制4年 Kさん）

A：「あなたが共感したのはどういう所ですか？」

震災当時の年齢が近く、似たようなものを感じました。私は当時3歳で、何も分からなかったけど、周りの大人達に守られ、ここまで成長することができたのだと今になって強く思うようになりました。だから、高校生になって私たちにできるのは「震災の出来事を次の世代に繋いでいくこと」という部分に、とても共感しました。アチェの人々の「思いやりの心」と「笑顔」を、辛い時に思い出してみようと思いました。

B：「選んだ小論文を読み、これからあなたができることは何ですか？」

ほとんどの小論文に共通しているのが、「震災の出来事を伝えていくこと」でした。だけど、私は3歳で母と祖母と一緒に逃げたことしか覚えていません。そのため、当時の状況を伝えることはできません。そんな私にできることは震災のことを少しでも多く学び、知識をつけることだと思いました。資料を見たり、実際に震災を経験した方々から話を聞きながら、「決して風化させないこと」が重要なのだと思います。そうすることによって、もしまた大震災が起きてしまった時、多くの人が助かり、悲しい思いをする人が少なくなっていて欲しいと思います。

普段から、災害への対策をしていきたいです。

選んだ小論文

09) 【震災当時、保育所年長（5歳）】 令和2年度・宮古北高校1年 Hさん

『東日本大震災から十年目の今、私ができること』

3月11日。あの日からもう10年が経とうとしています。私には何ができるのだろうか。まず、私は当時、保育所の年長だった。保育所の記憶など忘れていくことが多いが、あの時の記憶、あの、木をなぎ倒しながら来る真っ黒い大きな波は今でも昨日のように鮮明に覚えている。まだ5歳だった私にとってはショックが大きかったが、みんなの笑顔・元気・優しさに励まされ、ここまでくることができた。だから私ができることの一つ目は、辛い時にこそ『笑顔』でいることだ。そこで私が見習いたいのがアチェの人々だ。アチェの人々はただ頬を上げるだけの笑顔ではなく、思いやりの心からくる笑顔で、その心からの笑顔というところを私も大切にしていきたいと思った。

そして二つ目は、震災の出来事を次の世代へとつないでいくことだ。正直、田老は防浪堤があったので逃げなかった人もいたと思う。だから防浪堤があるから安全・安心ではないということ、地震が来たら逃げる準備・覚悟をし、自分第一で行動することを特に伝えたい。次に、このような災害が起きた場合、一人でも多くの命が助かってほしいので、語り継いでいくことが今の私にできることである。

心からの笑顔、そして、次の世代へと語り継いで風化させない。この目標を日々忘れず活動していきたい。

(令和8年度宮古高校定時制1年 Aさん)

A：「あなたが共感したのはどういう所ですか？」

私は、物資を送るだけが支援ではなく、助けたいという気持ちが大切だという考えに共感しました。困っている人は、物だけではなく寄り添ってくれる人がいることでも安心できると思います。私も困っている人を見かけたら、自分にできることを考えて行動したいと思いました。これからは世界で起こっている問題にも関心を持ち、自分にできる支援について考えていきたいと思っています。

B：「選んだ小論文を読み、これからあなたができることは何ですか？」

私がこれからできることは、困っている人がいたら自分から声をかけたり、できる範囲で手助けをしたりすることです。また、災害や世界で起きている問題について知り、関心を持ち続けることも大切だと思います。

募金活動やボランティア活動に参加できる機会があれば、積極的に行動したいです。一人の力は小さいかもしれませんが、多くの人が協力すれば大きな支えになると思います。これからは、相手を思いやる気持ちを忘れず、自分にできることを少しずつ実践し、誰かの力になれるように努力していきたいです。日頃から思いやりの心を持ち、自分にできる事を続けていきたいと思っています。

選んだ小論文

01) 【震災当時、宮古高校2年生】 平成23年度・宮古高校3年 Sさん

『私が考える(できる)国際協力や支援活動』

私が考える国際協力とは、ただ物資を送るということではないと思う。お互いがお互いを助けたいという気持ちを持つことこそが国際協力なのではないかと考える。

今、世界では紛争が起きていたり、飢餓で苦しむ人がいたりたくさんの問題を抱えている。そして、3月11日に東日本大震災が起き、支援が必要な人が大勢いる。大震災を経験し、人の命の尊さ、今までの自分の生活がどれだけ贅沢だったかなど様々なことを考えさせられた。中でも強く思ったことは、協力し合うことの大切さだ。避難所にボランティアに行ったおり、外国のボランティア団体も多く見かけた。その中の1人がおばあさんの肩をもみ「僕らがいるよ」と片言で話しかけていた。そしておばあさんが「力になりたいって思ってくれることが一番うれしいよ」と言っていた。私はその通りだと思った。確かに、物資の支援がとても大切で、物資がないと生きていけない人もたくさんいると思う。でも、力になりたい、助けたいと思うことが支援される側も一番嬉しいと思うし、その気持ちが一番大切なことだと思う。力になりたいと思う気持ちから国際協力は始まっていくので、その気持ちを持つことが大切だ。

世界には、まだまだ知らない問題があると思う。私は問題を知り、理解することから支援につなげていきたいと思う。

(令和8年度宮古高校定時制1年 Dさん)

A：「あなたが共感したのはどういう所ですか？」

この小論文を読んで、シムル島の歌の「スモン」がとても分かりやすく、内容もしっかりしているという点にとっても共感した。震災の記憶をただ怖く伝えるのではなく、覚えやすい歌にして、小さい子供たちが安心して聞ける素敵なアイデアだと思いました。自分も高校生活が始まった時は分からない事ばかりで緊張していました。だから、みんなで楽しく助け合える方法を見つけるのは、とても大切だと思いました。

B：「選んだ小論文を読み、これからあなたができることは何ですか？」

これから自分ができることは、津波が来てから考えては遅いので、「どのように逃げる」を事前に伝えることです。そのために、ゲームや遊びを通じて津波に関心を持ってもらえるように工夫したり、ポスターを作ることができると思いました。さらに、ネットを通じて情報を発信したり、ボランティア活動に参加したりして、周りの人と一緒に楽しく防災について考えることができると思いました。難しいことでも、みんなで協力すれば、できることはたくさんあります。自分にできることから一歩ずつ取り組んでいきたいです。そして、大切な人の命や自分の命をしっかり守れるようになりたいです。

選んだ小論文

06)【震災当時、鯉ヶ崎小学校6年生】 平成26年度・宮古高校1年 Yさん

『東日本大震災を後世に伝える方法』

私が東日本大震災を後世に伝える方法として最適だと思うのは、シムル島で歌われている「スモン」のように、親しみやすい方法で伝えることだと思います。「スモン」は、韻を踏んだり、リズムカルなので、子どもでも分かりやすくなっています。そして、歌うことによって覚えやすくなっています。歌詞も明るく、避難するときに役立つものが多いです。後世に伝えるべき事は、「津波の恐さ」だけではなく、「どのようにして逃げるか」だと思います。

伝えるためには、歌をつくる他にも、「紙芝居」や「絵本」、「かるた」など、子どもの遊びを取り入れるのが良いと思います。そうすることで、小さい頃から遊びながら津波に対する知識をつけることができます。私が卒業した小学校では、実際に「津波防災かるた」というものがありました。その「津波防災かるた」は卒業生が作ったもので、小学生でも分かりやすく、内容も面白いものが多かったです。こういったものを、もっとたくさん作って、幅広い世代の人達に楽しみながら覚えてもらえれば、もっと後世に伝えやすくなるのではないかと思います。

震災から時間が経てば経つほど、人の記憶から忘れられてしまうので、後からみても分かるように、形にして残すのが最もいい方法ではないかと思います。

(令和8年度宮古高校定時制1年 Fさん)

A:「あなたが共感したのはどういう所ですか？」

私は、震災の事を考えて伝えていくことに共感しました。なぜかと言うと、私は生まれたばかりで、震災の事は記憶にないからです。そのため、被害状況や当時の様子・教訓などを学んで、これから先の人達に伝えていくことを続けていきたいです。

そして、私も宮古市の魅力を伝えられるように、宮古市のことをもっと好きになり、被災地でもあった宮古市のことを伝えていきたいです。

B:「選んだ小論文を読み、これからあなたができることは何ですか？」

私がこれからできることは、宮古市だけではなく、岩手県全体や東北の宮城・福島で起きたことを学習し伝えていくことです。東日本大震災の被災地といっても各地域で被災状況は異なると思うので、それぞれの地域で起こった震災のことを詳しく知って、後世の人達に伝えていくことが大事だと思います。

震災から15年が経って、震災の記憶が薄れていると思います。でも、絶対忘れてはいけないことなので、しっかり学習し忘れないようにしたいです。最近、三陸沖で大きな地震が多発しているので、家や学校などでの避難先を把握し、4月の授業中に急に起きた地震のようなことあっても、慌てず冷静に行動していきたいです。

選んだ小論文

10) 【震災当時、田老第一小学校1年生】 令和2年度・宮古北高校2年 Yさん

『東日本大震災から十年目の今、私ができること』

東日本大震災から10年が経とうとしています。私は小学生の時、未来の田老を題材にした劇をしました。中学生の時は、「田老を語る会」をしました。「田老を語る会」では、被害状況や当時の様子・教訓などを、津波を経験したことのない人に伝えました。私ができることは、考えて、伝えていくことです。「田老を語る会」は、現在の中学生も行っています。私はそれをこれからも続けていってほしいと思います。

私は震災で家族を2人亡くしました。当時まだ小学校1年生だった私は、そのことがよく理解できずにいました。ずっと2人の帰りを待っていました。そのことを思い出して泣くことが時々あります。亡くなった人のことを思い出すことも私にできることの1つです。たとえ亡くなっていたとしても、私の思い出の中で生きていてほしいと思うのです。

私は絵を描くことが好きです。昔から絵で好きなものを表現することが好きでした。私はいつか、もっと絵を描く技術を上げて綺麗な田老の海を描きたいと思っています。現在の田老はお店は建ってきましたが、まだ人が少ないと思います。田老の魅力を知り、それをたくさんの人に広めてほしいと思います。私も自分の絵で田老の魅力を伝えられるように、田老の事をより好きになりたいです。